「バーチャル世相に物申す」

齢を取って来ると、“世の中腹立たしいことばかり・・・”という感が強くなってくる。この感覚は大半は頑迷老人特有の病状であるが、世の中の様相が何かオカシクなってきたのではないかという気もするこの頃である。

特に社会のＩＴ化が進んで、情報の氾濫とカタカナ言葉の横行、何をするにもネット経由という世の中になってくると、やはり最初にその皺寄せを蒙るのはそのようなＩＴ化社会の流れに乗れない老人という寸法になる。

極く身近な例でも、例えば、昔は往復はがきで申し込めば用が足りた〇〇市主催△△文化講演会等の申し込みも今ではＱＲコードからスマホで申し込むスタイルになってきたし、また、昔は駅に掲示されていた時刻表が全く姿を消して時刻表は各自スマホで見られたしという塩梅になってきた。

また、先日は家の近所の公園に電動サポート自転車の駐輪場が出来たので、貸し出して貰って試乗してみたかったのであるが、説明板には「借り出しや返却はスマホから簡単に」と書いてあってスマホを持たない小生はどうにもならなかった。

スマホを使えないご老体は日常生活も立ち行かなくなってきたという訳である。政府も自治体も行政のデジタル化を進めて役所への申請書類などもスマホからという方向に進めているし、店で買い物をしても支払いはスマホでというケースも増えてきているので、スマホが使えない人種は世の中から抹消される運命にあると言っても過言ではない。

長い間のコロナ不況のために職員数も削減され、そのために昔は人間が対応していたこの種の業務サービスも機械に取って変わられた訳で、それはそれで仕方ないことではあろうが、ロボット社会の味気なさは尋常ではないと感じているのは小生だけではなかろう。

小生はスマホは使ったこともなく、携帯は今でもガラ携しか使え（わ）ないので、スマホの便利さを知らないからスマホを毛嫌いしているのだと人から言われるのであるが、例えばの話、電車の乗客の殆どがロボットの如き無表情な顔をしてスマホの上で指を忙しく這わしている世相は、これはやはりどこかがオカシイと言わざるを得ない。昔風の小生は、例えば電車の隅で小さくなって文庫本を読んでいる乗客が居ると“頑張れ、ご同輩！”と心底からホットするのである。

電車の乗客がスマホで何を見ているのかは存じ上げないが、画面の上で指を激しく動かせている様子ではどうせガセネタ情報渦巻く大海から“小魚”でも釣っているのではなかろうか。最近では映画や演奏を視聴するのも、スマホでは“早送り短縮版”という代物があって、友達との会話で話を合わせるためにだけスマホの画面を覗くということも流行っているのだそうな。

マ、情報を見るにはスマホは便利な情報ツールではあろうが、小生には目の敵（かたき）に見えて仕方がない。ＩＴ化社会に対応できない老人の泣き言といえば、それまでであるが・・・。

さて、お断りしておきたいが、小生はＩＴ化社会の先兵であるスマホ自体を憎んでいる訳ではないし、また、ＩＴ技術の進歩や社会のＩＴ化、ＡＩ化自体に背を向けている訳でもない。それはそれで大変結構なことである。例えば、スーパーコンピュータの発達によって、天気予報の精度が格段に進歩し、或いはＤＮＡ解析によって医療技術が大幅に進歩するなどの科学技術上の革新やＡＩ技術の進歩、役所や会社の事務システムの効率化、国際間のグローバル即時情報交換の発達など社会のＩＴ化によるメリットは計り知れないものがある。

しかしながら、例えば、国際社会のグローバル化という現象は、ＩＴ技術の発展によってもたらされた結果であり、各種情報の全世界即時共有という一見便利な環境を提供したが、実はこの結果、世

界の各国が夫々持っていた独自の政治・経済・文化などの多様な伝統が押しなべて画一的な内容に焼き直されてしまって、本来持っていた国ごとの多様性が失われてしまった。その結果、米国に主導された新自由主義なる経済体制の基での利益追求至上主義がグローバル・スタンダードになり、例えば米国の悪弊であるアメリカン・ドリームの思想が全世界を席巻してしまい、全世界の人間が利益追求にのみ突っ走っている事態を生み出した。このような現象は、実はいわゆるＧＡＦＡと呼ばれている米国巨大ＩＴ企業が政府を抱き込んで企んだ陰謀ではないかと勘繰りたくもなるのである。

序に、最近は日本の国会での論議や答弁、政策官庁での政策の立案などにも“チャット型ＧＰＴ”なる対話型ＡＩ技術を導入すべしと複数の大臣がノタマッテいるが、もし左様であるなら大臣や国会議員や官僚などは全て廃止してＡＩロボットに任せた方がよろしいのではあるまいか。

私事で恐縮であるが、小生は定年退職するまでコンピュータ業界の末席を穢していたために今はその年金で細々と生きておられるのであるから、情報業界に足を向けて寝られないということも事実である。しかしながら、文明の利器は使い様ということもある。物事には必ず表裏もある。かって、原子核物理学の進歩が原爆を落し、また核反応廃棄物の処理方法が無い放射線廃棄物を出し続ける原子力発電所を作ったこと等がその良い例であろう。

上で述べたようにＩＴ技術の進歩は便利な世の中を作った反面、世の中のバーチャル化（その結果、人心の疎外と荒廃）も齎した。ある意味では、上記の原爆や原電の被害よりももっと広範囲で（グローバルで）根が深い本質的な弊害ということもできよう。

その典型が、子供の頃からスマホをイジル事に慣らされた若者は、世の中との付き合いと言えば他人との交流を対面で付き合うことができず、常にスマホ経由などのバーチャルな世界でしか付き合うことができないという弊害ではなかろうか。学校でのイジメや登校拒否、引き籠りなどはその延長線上にあると思う。このことは、人間の友人ではなく、ロボットの友人と付き合っていることと同じであろう。

リアルな世界ではなくバーチャルな世界に沈殿するということは、付き合っている世界が現実の世界ではなく自分が自分の好みに合わせて捏造した仮想の世界であるから、ここには共同体社会の一員として生きる人生の楽しみも悲しみも、又生きる意味も無いと思う。

更に言えば、バーチャルな世界が犯罪の温床になっていることも見逃せないことであろう。仮想通貨などと称するインチキもここから生まれている。

このような仮想空間を用意して、そこに客を惹き込み、実体のない御託を並べ立てて各種インチキ取引を行なって巨万の富を得ている所謂インチキＩＴ商売の若社長の行く末は、例のホ〇エモンの例を見るまでもなかろう。

話が飛ぶが、今の入学試験は受験生のアタマに如何に多くの多種雑多な知識が詰め込まれていて、しかもその知識の断片を繋ぎ合わせて問題の回答を如何に速く弾き出せるかという試験問題であるらしい。即ち、膨大な知識を詰め込んだ walking dictionary の情報蓄積量の多寡と、そのアタマに搭載されている超高速コンピュータの演算スピードの速さを試す試験のように思われる。このような試験ならＡＩロボットの方が勝つに決まっている。

入学試験に限らず、このような試験を突破して来た所謂秀才が幅を利かす社会では、高価で無益なロボットに高い人件費を払っているようなものだろう。彼らのアタマは従来の方法で解が得られる枠の中でしか働かないから、安物のロボットに高い経費を払っているという馬鹿馬鹿しい結果になる。

要するに、何をするに付けても、過去の人々が敷いたレールの上しか走れない人物が如何に高度な

プランを描いてみてもそれは雑多な知識の破片の膨大なゴミの山を描いた単なる絵に描いた餅であって、“心”が通っていないプランであるから、ただそれだけのシロモノにしか過ぎないという訳である。智慧を使って物を考えるのではなく、世界中から同様な雑多な知識を寄せ集めて来て砂上の楼閣の解答を作るのに長けた人種に成り下がっているという寸法である。

2019 年の東大入学式の祝辞で社会学者の上野千鶴子東大名誉教授は、「(前略) あなた方を待ち受けているのは、これまでのセオリーが当てはまらない、予測不可能な未知の世界です。これまであなた方は正解のある知を求めてきました。これからあなた方を待っているのは、正解のない問いに満ちた世界です。(中略) 大学で学ぶ価値とは、すでにある知を身につけることではなく、これまで誰も見たことのない知を生み出すための知を身に付けることだと、わたしは確信しています。(後略)」と述べている。

これは、天下の（？）東大入学試験を突破してきた新入生が必ずしも自ら考える力で入試を突破してきた学生ばかりではなく、所謂 walking dictionary としての知識を詰め込んだ受験勉強の勝者としての入学生が多数を占めているという認識を踏まえた上での言葉であって、これからの学生としての勉強のやり方の本質を鋭く突いた祝辞であろうと思われる。

いずれにしても、実質を伴わないバーチャルな世界ではどのように行動しようとその実態は誰にも見られない仮想の別世界であり、常に避難壕に逃げ込んでいるようなものである。従がって、夢か現かも判らなくなり、更に進めば人生も全てゲーム感覚の如きものとなるのではなかろうか。そこが怠惰、自己中心、犯罪の温床になるのは理の当然であろう。

苦労せずして得られた知識はすぐ消えていく。同じ知識の海で遊ぶなら、スマホをイジって遊ぶよりも言海などの国語辞書の斜め読みの方がまだマシなのではあるまいか。

以上、縄文時代博物館の片隅で埃を被って佇んでいるジオラマ爺さんの独り言でした。
皆さんからの反論を期待しています。

(2023 年 3 月　記す)